

---

## 巻 頭 言

「ダイナミック・クリエイティブ・ナレッジ」は本学としての知のあり方を表したものである。これは、最高学府としての大学として知識のあり方、獲得の仕方について、従来型の静的かつ固定的な知識では、絶え間なく進展する技術への適応が困難であり、社会の実問題解決への道筋が描きにくいという課題解決のための知のあり方を示している。それと同時に、本学の紀要の名称でもある。第2巻の本巻頭言では、岩波科学の解説「ロボット學の創成と社会工学としてのロボット工学」から引用しながら、筆者のライフワークの一つである「認知発達ロボティクス」の思想的背景を眺めてみる。哲学史の観点から、正確を期するために、東洋大学文学部松浦和也教授にご協力を頂いた。ここに感謝する。

認知発達ロボティクスは、人間の認知発達過程をロボット実験やシミュレーションなどの構成的手法を通じて、新たな理解を獲得する事を目的としている。ただし、この領域が認知とはどのようなものか、より包括的に言えば、人工物の心のようなものとしてのココロ（筆者は健常者の大人の「心」、子供や発達障害者の「こころ」、そして人工物の「ココロ」と使い分けている。）とは何であると了解しているか、という問いが向けられる。

この領域における了解は、さまざまな哲学・思想から示唆を受けて成立しているが、核となるアイデアは、物理的埋め込み（身体性）と社会的相互作用、すなわち、他者を含め環境との相互作用を通じて情報は構造化されていく、という点にある。このアイデアを軸にしたココロに関する了解を、近世哲学の礎を築いたとしばしば言われるデカルト（Descartes）の思想と対比させる形で概略する。

デカルトと言えば、「われ思う、ゆえにわれあり」や「心身二元論」が有名だ。前者は、理性的に思考する「わたし」がいままさに理性的に思考していることに、知識の究極的な基盤をすえる。また、後者は、「わたし」すなわちココロと、見たり触れたりできる物体は、別々の存在者であり、一方が他方に還元されることがないと考える。そして、ココロは知識の基盤であり、物体はココロのその後にあらわれてくる以上、近代西洋哲学では次第に、ココロは「基に置かれたもの」(subiectum)、すなわち「主体」(subject)として、物体は「向こうに置かれたもの」(obiectum)、すなわち「客体」(object)として、対比的に把握されていくことになる。

しかし、認知発達ロボティクスは、ココロを人工物によって再現する以上、デカルトの西洋近代哲学的発想からは距離を置かなくてはならない。ここで、ヘーゲル以降の哲学の展開によってもたらされた知見は、この領域にとって有益な示唆を与える。

たとえば、現象学の提唱者であるフッサール（Husserl）はデカルト的な「わたし」を知識の基盤とは考えない。のみならず、自分自身の意識から離れた、客観的な物理的対象が存在するという常識的で自然科学的な信念を一度「カッコに入れ」、その存在非存在については判断を留保することを求める。（「現象学的還元」と呼ばれる）。ただし、この場合の意識とは「わたし」だけで成り立つものではありえない。われわれは「客観的」な対象（たとえば目の前のコップ）に関して、共同して同じことを語りうるからである。ここに、主観単独ではなく、複数の主観が協働する「間主観性」(Intersubjektivität)を通じた人間の意識のあり方が立ち現れてくる。

このように、ココロは独立した存在者として客体に一方向に働きかけるのではなく、何らかの形で相互作用性を有するものとして捉えるのが、認知発達ロボティクスにおける主要な立場のひとつである。そして、この領域は、フッサールだけではなく、他の哲学・思想からも様々なアイデアを受けている。

たとえば、ハイデガーの「現存在」(Dasein) (『存在と時間』) は、どちらかと言えば主体性や主観性が強い概念であるが、ここには不安や恐れと言った気分や、歴史性や可能性も現存在の理解には本質的に含まれている。このような考え方をモデル化すれば、つねにココロのあり方は、過去と未来の出来事や様態によって常に作用され、作用し続けるものとして捉えることができる。また、メルロー＝ポンティ (Merleau-Ponty) は、「知覚の主体」と「知覚された世界」が同時に現れてくる場として身体に着目した (『知覚の現象学』)。このような身体観は、認知発達ロボティクスにおける基本概念のひとつである「身体性」の根幹である。さらに、ウィリアム・ジェームズや、彼に影響を受けた西田幾多郎が唱える「純粹経験」は、主体と客体、主観と客観の二元論の克服のために提唱された概念であるが、いかなる判断も反省も加わっていない単純で純粹な経験は主観的でも客観的でもあるという視座を提供している。

このように、ヘーゲル以降の哲学が認知発達ロボティクスにもたらす第一のものは、主体と客体の区別を超えたココロのモデルであるが、さらに、この種のロボティクスの社会実装が直面しつつある諸問題を扱うための社会的・倫理的視点も提供する。

西洋哲学史上、人間のココロや本質を理性に置くことはデカルトにはじまったものではなく、その根源を辿るとおそらくソクラテス以前の哲学者に遡ることができる。ただし、デカルトに連なる倫理思想や政治思想は人間を理性的な存在者として捉える傾向が強い。たとえば、カントの定言命法に代表される義務論は、道徳的であるためには理性的であることを求めているし、ベンサムらが展開した功利主義は、行為選択の基盤に功利計算がある以上、十全な計算能力を有する理性的存在者を想定している。

しかし、人間のココロや本質は理性であるという考えは、ヘーゲル以降は様々な形で攻撃されている。『死に至る病』等で実存思想を展開したことで有名なキルケゴールが反対したのは、理性だけによっては組みつくせない人間のあり方であったし、ニーチェが『善悪の彼岸』で対決している思想家の一人はカントであった。

のみならず、西洋近代哲学が半ば無自覚に前提していた人間中心主義は、自然科学的観点からも思想的観点からも否定的な立場が形成されつつある。人間中心主義は、存在者を主観と客観、主体と客体に区分し、人間の理性を主観・主体側に配置することで、(実践) 理性に従いつつも自由意志を持つ人間に因果関係の起点となる資格を与えた。他方で、物体は物理法則と自由意志に従属する存在ではあっても、因果関係の起点にはなり得ない。しかし、そもそも自由意志なるものが仮に存在したとしても、人間の振る舞いや行動に自由意志はどこまで参与しているのだろうか。むしろ、神経科学・生理学・認知科学などの発展は、因果関係から無縁の自由意志を認めないだろう。また、深層学習に代表される機械学習が示唆していることは、人間は常に主体的に行動を判断しているというよりも、周囲にある事物や技術が人間に判断を促し、人間の意思決定にもコミットしていることである。ピーター＝ポール・フェルベーク (Peter-Paul Verbeek) が主張するように、「技術は、我々の行為や世界経験を形成し、そうすることによって、我々の生活の仕方に能動的に関わっている」。つまり、本来、人間を利するために設計された人工物は、人間の行動や倫理規範を支配しているのである。

その意味では、たとえばフーコーが指摘するような、あるべき人間像に基づく道徳的評価は、結局標

---

準的な人間になることを求めること以上の意味を持ち得えず、摩擦なき、しかし個人の自律も創造性もない「透明なコミュニケーション」という倫理観は的を射ているし、ブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) が警告するように、高度な科学技術の進展により、主体と客体が入り混じったハイブリッドな世界となっている現代社会において、人間中心主義および主題と客体の二分法から距離を置く姿勢が求められるであろう。

このような現代社会のとらえ方から認知発達ロボティクスが着目するのは、17～18世紀の哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコ (Viso) である。彼の格言「真理それ自身は造られたものである」(Verum esse ipsum factum) は、従来の説明原理に基づく科学ではなく、設計原理を内包した構成的手法の思想的原点であると見なし得る。この構成論的手法によって、人間のさまざまなミステリーが解明されると同時に、共生社会における人工システムの新たな位置づけも明らかになる。本紀要に収められている論文や解説も、背景にこのような考え方があるものと想定し、さらに拡充・進展を続けることで、未来社会の設計に貢献するものと期待したい。

副学長 浅田 稔

